
空の瞳。

anchu.

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の瞳。

【Nコード】

N96640

【作者名】

anchu.

【あらすじ】

ただ僕は君に逢いたかった。見たこともない君に。

僕と空。

昔からある感情が自分の中には あった。

「君”に逢いたい。」

その君が誰なのが、僕は知らない。

だけど幼い頃から僕の心では君を求めてた。
ただ、ひたすらに。

それは16年たった今でも、色あせることはない。

——
君に逢いたい。

「なあ、お前、もうコンクールの、撮った？」

そう声をかけてくるのは数少ない友人の1人で、同じ部活の、だ。
そういう僕たちは2人だけの写真部だった。

彼が部長、そして副部長は僕。

彼はモノクロで、僕はカラー。

「まだまだよ、そういうお前も撮れたの？」

「ははっ俺もまだ。いい表情に出会わなくてさー、皆顔が死んでんのよねー。」

あーあいい表情落ちてないかなあ。」

「表情が落ちてたら怖いよ、生首でも撮る気？」

彼がうーんと伸びをしながら、いつもの笑顔で笑う。

「そりゃ勘弁。」

そう彼は総じて撮るのは人の表情（かお）。

笑顔であつたり、泣き顔であつたり、怒つた顔であつたり、色々だ。拘りがあるらしく、心惹かれる表情以外は一切シャッターを切らない。

頼まれても、写真は撮らない。

彼は世間に囚われない。

ただし、己の執念には囚われているんだろうけど、それは僕も同じだ。

ただ君に囚われてる。

出逢つた事もない君に。

「じゃあ僕は行くよ、期限も近いしね。」

そういつて部室を出る。

後ろで表情落ちてきたら拾ってこいよーなんていいながら

手をひらひら振る彼を背に気が向いたらね、とだけ返事をする。

いつもの丘で何をするわけでもなく、ただ座つて空を眺めていた。

彼に対して僕が撮るのは、空だ。

僕と空。(後書き)

使い方試行錯誤中です、あとで色々いじりますorz
高校のときに書いた絵本、もとい詩を元に書いてます。
ストーリーはなく、ただ、それが伝わればなーと。

ただ、君を想う。

僕は朱に染まっていく空を眺めていた。

そんな空と一緒に僕の心もじわじわ広がる感情。

それは不安じゃない。

在るのは希望と君を待ちわびる心。

いつ逢えるのかわからない。

もしかしたら、死ぬ直前なのかもしれない。

でも、明日すれ違う人の中に埋もれているかもしれない。

君は僕を知らないのかもしれない。

でも僕は知ってる。

姿は知らないけど、きっと逢えば僕にはわかる。

広がるのは嬉しさ。

きっと逢える。

だからこうやって1日が進むことに、僕のいつくるかわからない寿命が縮まるたびに。

君に逢える日が近づくんだから。

「——もし。」

これはいつか彼が言った言葉。

記憶をめぐらせると今でも鮮明に思い出せる言葉。

僕を救った、言葉。

「もしさ、運命があるなら、辿り着くところが決まってるんならこ
うは思わないか？」

「いきなりどうしたの。」

「まあ聞けって、俺のマイフレンドよ。」

わけのわからない行動はいつものことだ。

軽く聞きだがしていた。

それを不快に思わないのは彼の懐の広さであり、また何かに餓える証拠でもある。

その“何か”以外どうだっていいのだ、彼には。

「運命があるなら。」

行き着く先が、未来ができてから過去ができたんじゃないかって
そう思わないか？」

「つまりは？」

遙か彼方見えない何かを見るように、愛しむ様に目を細める彼。

彼もまた僕と一緒にだった。

僕も“君”以外どうだっていいのだから。

「もしそうなら未来が確定するまで不確かなもんだ、過去も現在も。

だけど俺らにはそれが希望だ、未来が確定してるなら、必ず。それがいつになるうとも。」

「・・・そうだね。」

そう。

今だ逢えない君を想う。

ただと逢えることはなんの根拠もないけど、確信してる。

じゃあ不安がることはない、ただ、来るべく未来を待てばいい。

だから僕は毎日君を待った。

ただ、君を想う。（後書き）

うーん、元が詩だからどこに行き着くんだろう？
漠然としたイメージはある。

僕が今を生きる理由。

あれからどれくらい経っただろうか？

あの日、結局僕は写真を撮れずにいた。

その後コンクールに出ることなく、名ばかりの写真部員だった。

それは彼も同じで、お互い未来に辿りつこうとだけ言葉を交わし、別れた。

その後連絡はとっていない。

だけど彼もまた、待っているのだろう。何かを。

そして僕は今日も空を見上げる。

ただこの広い空を。変わらないこの蒼い空を。

そして思う。

そんな僕の姿は“空の瞳”に映っているのかな？

ずっと見つめてるんだ、ちょっとは気にかけてくれているだろうか？
こんな小さな僕だけ。

風が吹く。

緑の波が足元を駆けていく。

僕はここにいます。

太陽が僕を照らし出す。

大地にひとつの影が生まれる。

僕はここにいます。

「だったらいつかは“君”の瞳に映ることができるよね？」

瞳を閉じ、心を馳せながら、手のひらをぎゅっと握り締める。
そしてまた明日へと足を踏み出すんだ、君を逢うために。

「さあ、今日もがんばろう。」

君と出逢うために、僕は今を生きよう。

まだ見たこともない君をただ、想う。
見上げれば今日も空は広がっているから。
君もこの空の下にいるから。

だって太陽と同じ空に顔を出す月がある事を僕は知っているのだから。

僕が今を生きる理由。（後書き）

これで空の瞳は完結です。

その後僕は君に逢えたのかは謎のまま。

でもこれがこうしてあなたの目に留まったのならば、
僕は君に逢えたのでしよう。

次は元ねたになった詩をあげて完結設定します。

元になった詩【空の瞳】

僕はただ空を見ていたんだ。

ただこの広い空を。この蒼い空を。

・・・そんな僕の姿は“空の瞳”に映っているのかな？

だけど風が僕を包み込む。

緑の波が足元を駆けていく。

僕はここにいます。

太陽が僕を照らし出す。

大地にひとつの影が生まれる。

僕はここにいます。

なら、見ることが出来るかな？

この空の終わりを

この宙の始まりを。

そしていつか僕はあなたの瞳に映ることが、できますか？

さあ、今日もがんばろう。

君と出会うために、僕は今を生きよう。

まだ見たこともない君をただ想う。

見上げれば今日も空は広がっているから。

アナタの瞳には今、何が映っていますか？

太陽と同じ空に顔を出す月がある事を僕は知っている。

元になった詩「空の瞳。」（後書き）

僕は君に逢いたかった。^{あなた}1つの出会いが1つの奇跡。
誰もまた“何かを”待っているのかもしれないね。

これはただ短くて書きやすそうなので書いただけでもあります（笑）
話自体はいろいろ考えてはいるんですが、たくさんあるのですが。
如何せん、このとおり文章下手なもんで。
書きやすそうなのから順にかけていけばいいなと思いつつ。

また君に逢えることを祈りつつ。^{あなた}

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9664o/>

空の瞳。

2011年9月8日14時39分発行